

八郎潟の現在と過去／漁撈用具から思いをはせ

谷口吉光（秋田県立大学）

八郎湖に関わるようになってから 15 年になるが、この仕事はものすごく想像力が求められるといつも思う。大潟村の広大な水田に立って、「干拓前はここは八郎潟の水底だった」と意識したり、濁った八郎湖の水を見ては「干拓前はこの中で子供たちが泳いだんだ」と意識する。いわば現在の風景と干拓前の風景を同じ価値のあるものとして二重に頭に刻み込んでいくのだ。

想像力を鍛えてくれるのは風景だけではない。十和田湖や田沢湖とつながる壮大な「八郎太郎伝説」、四季折々に潟魚を味わったという「潟の食文化」など、八郎潟時代の暮らしや文化を想像させる手がかりはいくつもある。

そのなかでも難易度が高いのが潟船（かたぶね）や漁撈（ぎょろう）用具だろう。そもそも漢字が難しい。潟船とは漁業で使われていた船、漁撈用具とは漁業で使うさまざまな道具のことをいう。

八郎潟の漁業？漁業で使う道具？ほとんどの人の頭には何のイメージも湧かないだろう。それくらい八郎潟の漁業は遠い過去のことになってしまった。

干拓前、八郎潟には約 3 千人の漁師がいて、日本海とつながった豊かな漁場で魚、シジミ貝、水草などを獲って暮らしていた。近代化以前の漁業だったので、船は地元の木から大工が造り、船を操る櫂（かい）、船に入った水を汲み出す「あかとり」、貝を掘る「じょれん」などは地元の材料を使って漁師や職人が手作りしていた。手作りなので同じものはひとつもないという。

八郎潟が干拓された時、漁師たちは漁業を諦めて漁業権を放棄した。その時、それまで使われていた膨大な船や道具は不要になり、無残に打ち捨てられてしまった。

それでも潟船や漁撈用具の価値を認める人たちが当時からいて、干拓工事が盛んに行われていた 1960 年には 1 隻の船と 78 点の漁撈用具が国の重要民俗文化財に指定され、潟上市の元木山にある「八郎潟漁撈用具収蔵庫」に保存された。

そののち、潟船や漁撈用具を「八郎潟の文化を語るものとして保存しよう」という市民団体「潟船保存会」の根気強い収集活動が始まった。収集されたコレクションの一部は潟上市の天王グリーンランドに設置された「潟の民俗展示室」に収められ、一般に公開されている。

「潟について語ることは単なる郷愁ではない。それは先人の知恵に学ぶ姿勢を持つことであり、自然と人間とが共生する道を探ることである」という同会の石川久悦さんの言葉はいつ読んでも胸を打たれる。

来る 9 月 22 日に、私がお会長のを務める八郎潟・八郎湖学研究会主催で「残された八郎潟の潟船と漁撈用具から学ぶ」という見学会を開きます。不思議な道具の数々を見ながら、過去の漁業の様子や人々の暮らしに思いをはせ、想像力を鍛えてみませんか。詳しくは NPO 法人はちろうプロジェクトまで（電話 018-874-8686 かホームページをご覧ください）。

（朝日新聞「あきたを語ろう」2018 年 9 月 9 日掲載分に加筆・修正した）